

特集展示「古代イタリアの陶器とコプトの染織・彫刻」

2014年1月5日(火)～2月11日(火・祝)

大阪市立美術館には他の公立美術館があまり所蔵していないユニークなコレクションがあります。そのひとつが、イタリア半島中部の先住民とされるエトルリア人などによる陶器類のコレクションであり、もう一つがエジプトにおけるキリスト教の信徒であるコプト教徒によって生み出された染織品と石彫作品のコレクションです。前者は、昭和30・32年の2回にわたってローマにあるイタリア国立先史民族学博物“ルイジ・ピゴリーニ”(Museo Nazionale Preistorico Etnografico “Luigi Pigorini”, Rome, Italy)との交換寄贈による所蔵品を中心とするコレクションで、後者は昭和37年に一括購入した館蔵品が中心です。

エトルリアは紀元前8世紀から紀元前1世紀ごろにイタリア半島中部にあった都市国家群で、12の主要都市国家がゆるやかにむすびついて、12都市連盟と呼ばれる連合体を形成し、同様な祭祀や軍事の共同などによって統一性を保っていたと考えられています。フィレンツェの南にあるアルノ川からローマの北にあるティヴェレ川までが主要な地域でしたが、最盛期の紀元前750～500年には、北はポー川流域のポー平原まで、南はカンパニア州にまで勢力範囲を拡大しました。やがて紀元前3世紀になると各都市国家は、かつての支配都市国家であるローマに敗れていき、紀元前1世紀にはローマに同化して消滅しました。エトルリア人の文化の基盤となったヴィッラノーヴァ文化の骨壺、エトルリア人が独自に開発したブッケロという黒光りする陶器、ギリシャのコリント式陶器の影響を受けた彩文陶器やアッティカ陶器の衰退によってアプリア(プッリャ)地方で生産された赤絵(赤像)式陶器や黒釉彩文陶器、ローマで作られた赤色陶器や白色陶器、そしてエトルリア人の死生観を示す奉納品や神殿の瓦類などを展覧します。

紀元2世紀頃に地中海世界に広まりつつあったキリスト教は、ローマ帝国支配のエジプトにもアレキサンドリアを中心に浸透して広く信仰されていました。コプトとは、ギリシャ語で「エジプト人」を意味する言葉ですが、一般にはエジプトのキリスト教徒、コプト教徒のことを指します。コプト美術は、紀元3世紀頃に始まり、コプト教会がビザンティン教会から分離した5世紀からアラブのイスラム勢力による支配を受ける7～8世紀に全盛期となったキリスト教美術ですが、13世紀のマムルーク朝の時代までの作品を含める場合もあります。コプト美術は、古代エジプト美術の伝統を根底にヘレニズムや、ペルシアなど東方の影響を受けながら展開していきました。染織では、綴織(つづれおり)による衣服の装飾や部屋の壁飾りなどが特徴で、石彫作品ではアカンサスの唐草文様や独自の動物文様が彫られた建築石材や墓石などがあります。中でもナイル川の流域の墳墓から出土したコプト裂は、19世紀にはヨーロッパのコレクターの間で人気を博し、「コプティック(Coptic)」という言葉が綴織の代名詞にもなるほどでした。綴織は、もっとも単純な平織(ひらおり)で文様をあらわした織物です。さまざまな色糸を緯糸(ぬきいと)にして色糸を細かく入れ替えることによって、1枚の面に人物や植物、動物といった具象的な文様をさまざまな大きさで表わすことができます。コプト教徒たちは、自分たちにとって身近なさまざまな動物文様やキリスト教の聖者や天使などを綴織で表わし、チュニックといわれる貫頭衣の装飾や部屋の壁飾りなどにしました。ローマ、ビザンティン、イスラムと支配者は変わりましたが、独自に築き上げられたキリスト教文化の一端を示す貴重な作品群です。

エトルリア人やコプト教徒による独自の生活スタイルから生まれた、ユニークな形や文様の世界をお楽しみください。